

おけよ」そう言っておじいちゃんはその日の新幹線で帰ってゆきました。

それから一ヶ月あまりぼくは自分がバーベキューになるところを想像すると怖くて怖くて夜もろくろく眠れません。一生懸命平気な顔でいるのですがトサカの色も悪いようです。そして九月の半ばすぎまたおじいちゃんがやってきました。

その日少し早く帰ってきたお父さんとおじいちゃんが話しています。おじいちゃんの前ではお父さんはまだ子供みたくです。「おじいちゃん、おれは近ごろ神社のお世話をさせて貰っているんだ」「ほほーそれはいいことだ」とおじいちゃん、「それでねー」とお父さんは続けます。「もうすぐ秋祭なんだがこの町もミコシのかき手が少なくて三年前からミコシは出さなかったんだが今年には是非出したいと

だ」「ふん、それで？」とおじいちゃんは乗りだした。「ところがおミコシの屋根に飾るホウオオという金色の鳥がどこを捜しても見つからないんだ。それでおれは考えたんだ

が、うちのオンドリをミコシの屋根にとまらせたらどうだろう」「それは面白い、あの鳥に金粉でも塗ってな」とおじいちゃんの太き声、さあ大変なことになりました。

おミコシの上にとまるのは鳥にとつては一番名誉なことなのです。ぼくはだんだん緊張してきました。そしてあつという間に一週間が過ぎ、いよいよお祭の日の当日です。朝まだ暗いうちにお父さんは神社にぼくを連れて行き、体中に金粉を塗ってくれたあと、ぼくの足をおミコシの屋根のまん中にガムテープでとめました。そしておミコシは大勢の若者にかつがれて宮出しです。

の行く先々の町や通りで皆さおんが「あれこの鳥生きてるよ」と言っていて驚いたり喜んだり、しっばにさわってくれる人までありました。

そしてこの栄光の一日が終わった時、おじいちゃんが言いました。「一度は神様におつかえした鳥だ、バーベキューにして食べるわけにも行くまいやれ」この言葉を聞いてぼくと同じくらい喜んでくれたのはぼくの飼いの主の勉強でしよう。ぼくは喜びのあまり夜空に向かって一声大きく鳴きました。

「コケローコー」



秋晴れの空の下、おミコシ

表彰式に出席して

三好 学



「僕が飛行機に乗るなんて、それこそオンドリコーキチがおミコシの上に乗るようなものだ」これが大阪の表彰式に出席が決まった時、私の頭に最初に浮かんだ言葉でした。そして十一月二十四日私は遂に空を飛んだのです。

さて表彰式はと申しますと、それはもう私の想像を遥かに越えた素晴らしい式でした。作家の先生方のお誉めの言葉を戴いた後、すぐ豪華なお部屋で立食パーティーがありまして、私など普段見たことのないようなご馳走が並んでいました。とにかく私にこのような素晴らしい体験をさせて下さった職員の方や出版者の人々、その他大勢の人々と神様に感謝したい気持ち一杯です。



と神様に感謝したい気持ち一杯です。

